

<目標、行動計画>2016年度 新規策定用シート

提出日:2017年2月23日

2021年度に向けた教育研究目標

教育研究目標6「大学院の在り方」

主管部局	学長室	担当部局	学長室
------	-----	------	-----

(タイトル)		大学院の在り方							
(狙い内容)		世界的な研究拠点形成のため、大学院教育の充実を図り、若手研究者の育成に努める。							
1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)									
質(意欲と学力)を備えた入学者を確保する。									
※↑上記の目標を設定した背景について記述してください。									
定員充足率の継続的な低迷									
2. 達成度評価									
評価指標	各課程の全研究科定員充足率の平均						評価尺度	A : 1.0以上 B : 0.81~1.0未満 C : 0.61~0.80 D : 0.00~0.60	変更有無
	<変更時記入欄> ※上記の評価指標を変更する場合は、こちらに変更内容をご記入ください。								有 無
3. 年度毎の目標値									
		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	変更有無
2016年度 (計画策定時)			博士課程前期課程(M) C 博士課程後期課程(D) C 専門職学位課程(P) C	(M) C (D) C (P) C	(M) C (D) C (P) C	(M) B (D) B (P) B	(M) B (D) B (P) B	(M) B (D) B (P) B	
2016年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	<実績>	実績	<2016年度末時点の 見込み又は実績又は目標> C					
	見込 実績・ 目標 (値又は 状況)	<実績>		<2016年度末時点の 見込み又は実績又は目標> C					
【2016年度の進捗状況について】 ←									
教務学生委員会のもとに大学院活性化部会を設置して検討課題を整理。その後、学長のもとに大学院検討WGを立ち上げる予定であったが、学長室会にて検討。検討の結果、2017年4月から研究科委員長会を設置し、全学的に検討を開始する。									
<変更理由記入欄:評価指標、評価尺度、年度毎の目標値が変更有の場合> ※変更がない場合は、本欄は記入不要です。									

2016年度の取組み状況の確認

2016年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか?	→	はい・いいえ
<上記で「いいえ」を選んだ場合>		
①理由: ※目標どおりに進まない要因を記述のこと。		
②今後必要な取組み: ※上記の要因を解決するための具体的な取組みを記述のこと。		

<評価専門委員会・第三者評価結果> 2017年2月6日公示

- 世界的な研究拠点形成のため、大学院教育の充実を図り、若手研究者の育成を図るため、大学院の在り方について全学的な視点から検討を加えるため、大学院検討WGで検討作業が行われていますが、当面は、大学院の定員充足が当面の課題であるようです。博士課程前期・後期、専門職大学院のいずれも、定員の60%を切っており、これを2021年度までには80%の充足率に高めることが目標となっているようです。しかし、大学院進学希望者数が伸び悩み傾向のある我が国の進学状況の中で、理工系の博士課程前期を除くと、目標の達成は容易ではありません。今後、大学院検討WGでどのような検討がなされるか注目したいと思います。伸び悩みの原因の分析は勿論のこと、他大学の動向や大学院に期待する社会的環境の調査は不可欠です。とりわけ、文科系の研究科が多い貴学にとっては、学問の動向もさることながら、大学院に対する社会のニーズを的確に把握し、場合に依れば、実績に合わせて定員の見直しを図るとか、研究科の再編や統合も視野に入れる必要があると思います。
- 学部からの進学希望者を増やすためには、単に学部教育の延長というだけでは、新たな学生のニーズの開拓には繋がらず、学部とは教育目標の異なる別の教育課程であることを、教育内容や方法において明確に示すことが必要です。定員充足という点だけに絞れば、社会人学生や留学生を受け入れる方向も考えられますが、それに相応しい教育システムや教育方法などを検討しなければならず、そう簡単なお話ではありません。社会人学生の問題は、生涯学習の項で述べますが、学び直しを求める社会人の学習ニーズは多様です。アジアからの留学生もアメリカの大学院の学費が安くなり、日本への留学のインセンティブは相対的に低くなりつつあるという事情もあります。日本人の学生の大学院進学希望者をどう増やすかが、定員充足のためには最重要課題であることには変わりはないと思いますが、大学院を取り巻く環境は、大学が考えるより遙かに厳しいというのが実状です。
- 大学院検討WGが手掛けるべき最初の課題は、学部段階での学士課程教育と大学院教育との相対的な役割分化を明確にすることであると思います。しかし、現実には、学部の上に設置されている煙突形組織になっているため、「高度な」という修飾語は付けられているものの、学部教育と類似した教育活動が同じ教員集団によって展開されているのが実状です。大学院とは何か、大学院は本来どうあるべきなのか、14研究科からなる大学院の組織や制度は現在のままでよいのか。非常に難しい問題ですが、この議論から検討を始めて欲しいと思います。(A)
- これからこの項目を充実して行かれるものと理解し、項目を設けられたことを評価します。ただし、「在り方」というのは方向性がなく、違和感があります。先にも書きましたように、タイトルについて改善が求められます。(B)
- 大学院については定員充足率の低迷の課題をかかえている大学が多数あるなど、各大学で重要な課題となっており、関学においても新たな課題設定がなされた点は評価できます。(C)
- 大学院の充実に向けた取り組みが期待されます。(E)
- 大学院の定員充足率の問題は深刻ですので、WGでの検討に期待します。(G)